鳥取県福祉研究学会第9回研究発表会　発表要旨等一覧

口述発表

No.	分野	分野No.	分科会場	発表時間	発表テーマ	発表要旨	研究代表者氏名	研究代表者所属機関・団体	共同研究者（所属省略）
1	高齢者福祉（施設系）	1	ホール	10:30～10:50	定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業における効果的な看護師のアセスメント ～アセスメント内容の分析～	定期巡回における看護師のアセスメント内容を分析した結果、臨床・機能・精神・社会面からなる12のカテゴリーが抽出された。アセスメント内容は多岐にわたっていたが、臨床面に偏っていた。最も求められていた臨床面のアセスメントの精度をより向上させるとともに、精神・機能面のアセスメント強化の必要性が示唆された。	モトイケ 本池　ユウコ 裕子	介護老人福祉施設 よなご幸朋苑	高須　美香 青木　歩美 堀田　幸恵 木村　真弓 藤原　和美 角真　如実 林原　美佳
2	高齢者福祉（施設系）	2	ホール	10:50～11:10	その姿勢大丈夫？～目的に合わせたポジショニングのすすめ～	私達のグループでは1日の大半をベッド上で過ごされている方が多く、褥瘡や拘縮の予防の為にポジショニングを行っているが多くの職員が「ポジショニングは難しい、よくわからない」というのが現状だった。そこでポジショニングを今一度見直す事にした、その取り組みの経過を報告する。	サカグチ　エリ 坂口　恵理	社福）あすなろ会 高草あすなろ	佐藤　美枝
3	高齢者福祉（施設系）	3	ホール	11:10～11:30	老健施設入所中の認知症高齢者に対するラフターヨガの試み	多くの高齢者は意欲低下を抱えていると考えられており、特に認知症高齢者にその傾向が強いと言われている。当施設においても入所者の約９割が認知症であり、生活の不活性化が課題となっている。近年笑いが健康にもたらす効果がクローズアップされていることから、ヨガの呼吸法と笑いが組み合わさったラフターヨガに着目し、ラフターヨガが認知症高齢者の意欲低下の改善に効果があるのではないかと考え検証した。本研究の目的は老健施設入所中の意欲低下が見られる認知症高齢者にラフターヨガを実施することで、意欲向上に繋がるのかを明らかにすることである。対象者を介入群５名と非介助群５名に分け、Ｈ２６年７月から９月までの２ヶ月間評価を行った。評価スケールとして意欲低下の評価に用いられる、やる気スコアと高齢者抑うつ尺度を使用した。結果介入群においてやる気スコアにおいて有意差が認められた。また介入群の利用者においては日常生活でも積極性が出てきたことからもラフターヨガは有効であったと考えられる。ラフターヨガの実施により日常生活へ「笑い」を取り入れることは意欲低下のみられる認知症高齢者へ有効であり、意欲向上につなげることができたので、今後の認知症ケアの一つとして活かしていけると考える。	フクダ　ユリエ 福田　祐里恵	介護老人保健施設 弓浜ゆうとぴあ	宮村　幸秀 遠藤　兼二 松本　智美
4	高齢者福祉（施設系）	4	ホール	11:30～11:50	口腔ケア道場 ～多職種のブラッシング技術向上を目指して歯科衛生士達の取り組み～	介護・看護現場において口腔ケアはすでに標準化されているが、実際に口腔ケアを行っている多職種からは、口腔ケアの重要性は理解しているもののブラッシング技術に対する不安や疑問を感じているという声を聞く事が多い。そこで平成２５年度から、様々な職場に勤務する歯科衛生士がブラッシングに重点をおいた研修を開催し、多職種のブラッシング技術向上や口腔ケア全般に対する不安の解消を目指した取り組みを行ったので報告をする。	タカバ　ユキミ 高場　由紀美	小規模多機能型居宅介護施設 時の里	香川　由美 田部　有子 足立　融 藤本　美香 羽田　季恵 毛利　恭子 広沢　紀子 渡辺　薫苗 道祖尾　むつみ 鷲見　有梨枝 西村　美希 森本　優 井田　有紗
5	高齢者福祉（施設系）	5	ホール	13:00～13:20	失語症への取り組みから見えたもの ～伝えたい言葉と分かりたい気持ち～	失語症のご利用者の「伝えたい」思いを少しでも理解できたらと思い。他職種と連携し、取り組みを行った事例。	フジナワ 藤縄　めぐみ	社福）あすなろ会 白兎あすなろ	杉本　泰樹
6	高齢者福祉（施設系）	6	中研修室Ａ	10:30～10:50	移乗介助技術の向上 ～安心し心地よいケアを目指して～	平成22年度より「利用者、職員双方に負担の少ない介護技術の習得」に取り組む中で、移乗介助技術の向上が課題としてあがった。そこで、平成26年度より「膝乗せトランスファー」という技術に着目し、双方の負担軽減や利用者の生活の向上を目指した。組織的かつ経年的に取り組んだ結果、職員の技術習得率、実施率が向上。そして、安心し心地よい介助は利用者の生活に変化をもたらすことが科学的証拠をもって実感でき、ひいては人材育成へも繋がった。その結果と課題を報告する。	オオシタ 大下　まさみ	社福）鳥取福祉会 特別養護老人ホーム若葉台	坂本　浩之
7	高齢者福祉（施設系）	7	中研修室Ａ	10:50～11:10	うつ傾向のある利用者との関わり ～笑顔と元気を取り戻したい～	話し好きで社交的なＡさんにうつ傾向を伺わせる言動がみられたことで、利用者の実態を知り、リクリエーションやアクティビティで活動性を高める取り組みをした結果を報告する。	タニオカ　マサヒト 谷岡　雅仁	社福）こうほうえん 介護老人保健施設 いなば幸朋苑	竹内　るり子 森山　大介 村田　律子

No.	分野	分野No.	分科会場	発表時間	発表テーマ	発表要旨	研究代表者氏名	研究代表者所属機関・団体	共同研究者（所属省略）
8	高齢者福祉（施設系）	8	中研修室Ａ	11:10～11:30	「農業しかできません」 ～Ａ氏の発言に隠された思い～	Ａ氏は90歳代後半と高齢だが自尊心が高く、消極的な発言が聞かれた。Ａ氏が長年行っていた農業に関わることで、過去の楽しさを感じてもらえないかと思い、Ａ氏の自尊心を尊重しながら豆苗の水耕栽培を行った。水耕栽培を体験することにより五感をとおして過去の時間を思い出し、価値観を尊重して4関わったことでＡ氏の言動に変化が起きた。	コバヤシ 小林　さつき	YMCA米子医療福祉専門学校 介護福祉士科	岡　美奈子
9	高齢者福祉（施設系）	9	中研修室Ａ	11:30～11:50	失語症のＡ氏の声を聞きたい ～意思表示が出来る環境作りのプロセス～	Ａ氏は普段言葉が不明瞭で、うまくコミュニケーションが取れない。コミュニケーションノートを用いた介護計画でＡ氏の意思を汲み取る援助を行った。その中でＡ氏が安来節を声に出して歌う事ができた。失語症で普段話せないＡ氏だが、音楽能力は保たれていた。思いを汲み取れる環境がＡ氏の表現を引き出すきっかけになったと考える。	ミズエ　マサチカ 水江　政親	YMCA米子医療福祉専門学校 介護福祉士科	藤原　紀子
10	高齢者福祉（施設系）	10	中研修室Ａ	13:00～13:20	「いきいき楽しく　健康づくり」	当施設では”いきいきたのしく”をモットーに利用者様に安心して快適に過ごしていただけるように支援しています。その為にも利用者様同士の交流がより親交していかなければ、達成できることはありません。利用者様の交流できる場を提供して、健康で心豊かに自主的な生活を送って頂ける様に支援を行いゆとりある生活を送っていただくため、利用者様が企画・計画し、職員は補佐をしていきながら、行事を行うことで自主・自立性と共に、脳・体の活性化を図り、更にクラブ活動へ繋げていく事です。	フクイ　チヅル 福井　千鶴	社福）みのり福祉会 関金インターケアハウス	佐伯　尚子
11	高齢者福祉（在宅系）	1	中研修室Ｃ	10:30～10:50	みんなで輪　～集団リハビリの取り組み～	通所リハビリテーションへ通う目的はリハビリである。個別の機能訓練以外に集団リハビリの視点より、施設独自の企画書を作成し多職種協働での笑顔のある楽しい集団リハビリを行い、ご利用者の達成感・満足感を得られた。	タケウチ　コウジ 竹内　幸治	医療法人賛幸会 老人保健施設はまゆう	田中　敬子 福田　修一 上田　ユミ 山根　大介 上原　美保子
12	高齢者福祉（在宅系）	2	中研修室Ｃ	10:50～11:10	「生活史に基づいた支援の試み ～Ａさんの特技の再現を目指して～」	個別支援の充実を計るためＡ氏の竹細工で生計を立てておられた生活史に注目し、その特徴を再現できないかとチームで情報共有しながら動機付けから作業の支援とつながった事例。	ヤスダ　ケイコ 安田　桂好	グループホームこころの里	板垣　かおる 河原　幸江 山﨑　あゆみ
13	高齢者福祉（在宅系）	3	中研修室Ｃ	11:10～11:30	私のしたい運動と必要な運動	当デイサービスでは利用者の身体機能と維持向上を目的とした運動にとどまらず、専門職の視点を取り入れ、利用者のもっている力を引き出しながら日常生活動作の改善につながる運動を実施したことで、利用者の満足度の向上につながった。多職種で連携を図り、一人一人の生活に密着した運動への取り組みについての報告	オカダ　ツネコ 岡田　常子	社福）鳥取福祉会 鳥取市南デイサービスセンター	福田　幸恵 田中　ゆかり
14	高齢者福祉（在宅系）	4	中研修室Ｃ	11:30～11:50	「やってもらう」から「自分でしたい」を目指して ～意欲を引き出し、身体機能の維持向上を図る取り組み～	日々入居者の身体機能の維持向上に努めているが、職員の関わり不足や思い込みにより、本来持てる力や意欲がッ引き出せていないのでは無いかと考えた。そこで個別に活動チェックシートを作成して、アセスメントを行いながら職員間で情報を共有し、思いやできる事を見つけていく。個別にその方にあった活動や支援を統一して行うことで、入居者の「自分でやってみよう」という気持ちが引き出せて、身体機能の維持向上に繋がった。	オカモト　ジュン 岡本　潤	社福）みのり福祉会 関金みのりグループホーム	島田　千夏
15	高齢者福祉（在宅系）	5	中研修室Ｃ	13:00～13:20	「当施設の要介護度の高い利用者に対する生活リハ」　～ＩＣＦの考えに基づいた生活リハの具体化～	介護度の高い利用者に対して、当施設の生活リハをＩＣＦの考え方に沿って構築し「環境因子」の一つでもある気持ちが増幅し、表出されることで出来ることが増えた。つまり、受動的行動を能動的行動に変換する過程が生活リハであり、その先に利用者のＱＤＬの向上があった。	トクダ　ヒサコ 徳田　尚子	社福）みのり福祉会 特別養護老人ホーム 倉吉スターロイヤル	前田　幸恵子 三谷　昭仁
16	障がい児・者福祉	1	第1小研修室	10:30～10:50	成人施設における強度行動障がい児の移行支援 ～U様の取り組みを通して～	事例を通して強度行動障がい児における成人施設への移行時の課題を検討するると共に、入所後の成人施設における課題について検討を行い、今後の強度行動障がい児・者への移行支援についての展望を図った。結果、提唱されている適切な支援の枠組みのうち実行度が高いものと低いものがあり、その要因の一つとして、著しい行動問題を呈するという強度行動障がいの特性から、行動減弱・維持のみに留まりがちとなる施設内における支援が考えられた。	イグチ　ケンイチロウ 井口　賢一郎	社福）鳥取県厚生事業団 羽合ひかり園	山根　直樹

No.	分野	分野No.	分科会場	発表時間	発表テーマ	発表要旨	研究代表者氏名	研究代表者所属機関・団体	共同研究者（所属省略）
17	障がい児・者福祉	2	第1小研修室	10:50～11:10	「Ｓ様の気になる表出行動」 ～伝えたい私の気持ち　わかりたいＳ様の気持ち～	Ｓさんの表出行動には、要求や訴えが内包されているという考えのもと、その要求の充実を実現するために、本人を中心としてどのような支援ができるのか、主治医と連携して取り組んだ内容を発表する。	カノウ　アサコ 加納　麻子	社福）あすなろ会 松の聖母学園成人寮	谷口　理恵
18	障がい児・者福祉	3	第1小研修室	11:10～11:30	精神保健福祉法改正後の現状と課題 ～鳥取県精神保健福祉士会会員へのアンケート調査を通して見えてきたもの～	改正法施行後1年経過時点における精神医療保険福祉の現場の実態を明らかにし、改正法の課題を整理するとともに、今後の精神保健福祉士の果たすべき役割について、改めて「本人中心の権利擁護」を基本としながら、精神医療保健福祉の実践の方向性を考察し、報告する。	コンドウ　ケン 近藤　健	鳥取県精神保健福祉士会	吉川　敦 鬼束　詠子 多田　博貴 原田　有梨 三谷　英行 山根　美沙 梅田　明良 三谷　智子
19	児童福祉	1	第2小研修室	10:30～10:50	社会的養護における自立支援からみえる青少年の貧困	社会的養護（児童養護施設）において、特に青少年の就労を前提とした支援を行う自立援助ホームの実践・支援の状況を通して社会的養護下の子どもたちの自立について課題検討を行う。また自立援助ホームは青少年の貧困が顕著にみえる場であり、自立支援ホームの実践・支援の状況を検討することで子どもたち、特に青少年における貧困の状況を検討する。そのことで青少年が自立に向けての課題を整理し支援に活用する。入居者の傾向（2004～2015年度前期分を調査）について数量的に分析を行った。実際の取り組みについて検討を行った。	ナイトウ　ナオト 内藤　直人	社福）鳥取こども学園 鳥取フレンド・鳥取スマイル	鷲見　智明 田村　崇
20	児童福祉	2	第2小研修室	10:50～11:10	柔軟でたくましい身体づくり ～リトミックを通して育つもの～	家庭状況の変化とともに、今までの育ちの中で身体を動かす経験が少なく、体幹の弱さ、そして心の弱さも見られる子どもたちに楽しみながら身体を動かし発達を促すことを目的とし『さくら・さくらんぼ』のリトミック活動を取り入れながら研究を行う。	ヤマシタ　ショウコ 山下　翔子	社福）あすなろ会 白兎保育園	村上　ちはる 澤田　祐子
21	児童福祉	3	第2小研修室	11:10～11:30	「しっかり噛んでおいしく食べよう！」 ～健康（健口）で丈夫な身体づくり～	子どもたちの身近な食事の様子から「噛まないですぐに飲みこむ」「口にふくんだまますぐに飲みこめない」などの姿が見られた、咀しゃくの気になる子どもの姿の特徴や実態より研究テーマを「しっかり噛んでおいしく食べよう」～健康（健口）で丈夫な身体づくり～とし研究目的として「子どもによく噛んで食べる事の大切さを知らせる」「集団活動やクッキングを通しておいしく食べる体験をする」「保護者に咀しゃくの大切さを知らせる」という3点を目標に研究を取り組んできた。	カワカミ　サチ 河上　幸	社福）鳥取福祉会 のぞみ保育園	山本　由起子 岡本　千恵 森井　ゆかり 松本　初美 岩城　望 山本　彩音
22	児童福祉	4	第2小研修室	11:30～11:50	めざせ！「いきいき輝け　こころとからだ」	昨今の社会の変化によって、子どもの体力低下が問題視されている。私たち鳥取福祉会保育園の子どもたちの姿でも、課題が見られている。そこで、鳥取福祉会では基礎体力研修チームを発足し、子どもたちが意欲的に身体を動かし体力が向上するように研究を進めてきた。体と心は相関関係にあり、子どもたちの心情面を育てることに視点を置きながら、体力向上、身体育てに取り組んできた。	アタラシゲオ 新　茂雄	社福）鳥取福祉会	上萬　貴志 松尾　晴美 長本　浩平 尾崎　多恵子 基礎体力研修チーム
23	児童福祉	5	第2小研修室	13:00～13:20	「ぼくもみんなと同じようにしたい」 ～統合保育における子どもの育ちをつぶやきから探る～	Ａ児が主体的に周りの子どもたちとの仲間関係をどのように構築していくかエピソードを類型化しながら支援方法を探り互いに認め合う関係作りを目指す。	マエタ　ヨウコ 前田　陽子	社福）鳥取福祉会 むつみ保育園	片山　咲子
24	児童福祉	6	第2小研修室	13:20～13:40	「主体的な保護者集団と保育園」 ～保育園が育む保護者集団　保護者が子育てを楽しむ保育園～	保護者自身が子どもと一緒に主体的に楽しむために保育園は保護者会にどう働きかけていくのか。そして、保護者の輪が広がっていく為に、保護者会もどう働きかけていったか。輪が広がることで保護者の仲間意識や子育て感の共有、保護者自身が保育園生活を楽しもうと「～したい」と主体的になってきた。保護者と保育園の関わりや協力が、いかに保育園にとって大事なことか、事例をあげている。	クラミツ　チ ナツ 倉光　智奈津	社福）みのり福祉会 向山保育園	
25	地域福祉	1	ベッド・トイレ実習室	10:30～10:50	鳥取市老人クラブ連合会会員増強活動について	会員の減少が進む中で対応策として若手委員会の設立を行った。若手委員会設立時の組織作りへの取り組みと委員会活動内容及び活動成果（加入実績）をまとめました。さらに今後の課題を整理して対応策を提案し、鳥取県老人クラブ連合会の８，０００人会員増強運動への参画と組織の発展を提案する。	ヤマモト　ミツノブ 山本　充延	鳥取県老人クラブ連合会	

No.	分野	分野No.	分科会場	発表時間	発表テーマ	発表要旨	研究代表者氏名	研究代表者所属機関・団体	共同研究者（所属省略）
26	地域福祉	2	ベッド・トイレ実習室	10:50～11:10	認知症行方不明者の捜索模擬訓練を通した地域づくりから見えてきた成果と課題 ～米子市永江地区での3年間の活動を通して～	近年の高齢化に伴い米子市においても認知症行方不明者に関する防災無線放送が増えている傾向にある。そこで米子市では平成23年より認知症行方不明者の捜索模擬訓練を実施し、警察や消防のみならず地域住民も巻き込んでの活動を行っている。これまで米子市で模擬訓練を実施した地区は４箇所で、今回報告する長江地区は３年連続で実施している。この３年間の活動を通して地域住民の意識の変化や実施してきたことの成果、また見えてきた今後の取り組むべき課題について報告する。	オグラ　ヨシフミ 小椋　善文	米子市福祉保健部長寿社会課	高梨　悠一
27	地域福祉	3	ベッド・トイレ実習室	11:10～11:30	世代間交流事業　私の思い	老人クラブと保育園児との関わり、ふれあい促進ボランティアをして感じた事。	スギハラ　トシオ 杉原　俊雄	大山町老人クラブ連合会	
28	地域福祉	4	ベッド・トイレ実習室	11:30～11:50	「個別支援から地域の福祉意識を高めていくには」	地域の支え合う力が弱まり、複数の課題を抱えた世帯が顕在化する中、福祉サービスや制度の支援だけではなく、社会的包摂の重要性が叫ばれているが、地域住民の理解と包摂を促していくにはどのように取り組んでいけばよいのか。住民と協働した事例をもとに支援者に必要な視点を整理し、住民の福祉意識について考察する。	フジタ　リョウジ 藤田　亮二	社福） 八頭町社会福祉協議会	

ポスター発表

No.	分野	分野No.	分科会場	発表時間	発表テーマ	発表要旨	研究代表者氏名	研究代表者所属機関・団体	共同研究者（所属省略）
29	ポスター発表	1	ロビー	10:30～14:50	ボランティア体験活動の現状と学び	米子北高等学校看護科は、５年一貫の看護師養成学校である。わが校は近年の保健医療福祉分野における地域のチーム医療や関連施設などの理解のため、ボランティア経験活動を推進している。 また、生徒達は看護師になりたいという希望を強く持ち入学し、日々の学習や実習に頑張っている。その強い進路意識や、ひとの役に立ちたいという福祉に対する関心から、ボランティア活動に前向きで、看護科２年生40名全員がボランティア活動参加の経験がある。 　今回、看護科２年生におけるボランティア体験活動の取り組みをまとめ、ボランティア活動の現状や、学びを振り返った。その結果、「達成感があった」「考えが変わった」など体験後に気持ちの変化がみられた。また、ボランティア体験活動を将来に結びつける姿勢がみられたので発表する。	イケノブ　ケイコ 池信　圭子	米子北高等学校　看護科２年生	